



ドイツ留学

- 細菌学および免疫学の領域へ -

1883 (明治 16) 年

大学を卒業すると同時に、内務省衛生局に就職した。

1886 (明治 19) 年

国費留学によりベルリン (ドイツ) のローベルト・コッホ博士の下で細菌学の研究を開始する。

1889 (明治 22) 年 ~ 1890 (明治 23) 年

世界で初めて破傷風菌の純培養に成功し、破傷風菌の毒素と抗毒素 (免疫体) による免疫システムを発見した。北里は、そこから抗毒素 (免疫抗体) を用いた画期的な血清療法を確立するに至る。



新たな挑戦 北里研究所

1914（大正3）年

国立伝染病研究所の管轄が内務省から文部省に移管されたのを機に研究所を辞職する。この移管は北里にとって研究拠点の剥奪を意味するが、北里は極めて冷静な態度で対応し、共に辞職した門下生等と新たに私立の北里研究所を設立した。常に医学の発展と国民の衛生状況の改善・向上を優先せねばならないという北里の基本姿勢の表れである。

「伝染病研究所は多年苦勞してやってきたが、今日では基礎も強固になり、もはや誰がやっても一通りの仕事は出来る。自分はむしろ別に1つの研究所を創立して立派なものにするつもりである。さすれば官立と相並んで、互いに他山の石として研鑽すればかえって国家の為になると思う」と述べている。



生い立ち・医学者をめざす

1853年1月29日（旧暦 嘉永5年12月20日）

父 惟信、母 貞の長男として肥後国阿蘇郡小国郷北里村（現在の熊本県阿蘇郡小国町）に生まれる。藩校時習館を経て18歳の時に熊本医学校（熊本大学医学部）に入学、オランダ人医師マンスフェルトより医学の重要性を学ぶ。

1874（明治7）年

東京医学校（東京大学医学部）に入学、当時の急性伝染病（特にコレラの蔓延）による惨劇に直面し、「医学はどうあるべきか、医者はどうあるべきか」を提示した自説「医道論」をまとめあげる。

摂生保健の道を説き、病を未然に防ぐこと

理論・技術両面の習得を心懸けること

公衆衛生に対する必要性を啓発すること



北里研究所設立趣旨

- 設立および開所式の挨拶より抜粋 -

「今回設立の研究所は同志同僚の希望により研究所の歴史に鑑み余の名を冠して北里研究所とせり。」

「そして総合的研究を為すことはもちろん、更に進んで益々その範囲を拡張すべし。」

「現代科学の研究というものは各科が別々に、従来のように孤立して、そうして障壁をその間に設けるといことは今日では許しませぬ。一科の進歩というものは他科の発達を促すものでありまして、相助け合いそれではじめて人類の福利を増進することが出来るものであります。」

「北里研究所の事業も、世界規模での医学発展において、医学あるいは衛生学のみならず、他の領域まで進入しまして農業、水産、工業等、その他にも我が微生物の研究を応用して国家、社会に貢献したい考えであります。」



伝染病制圧への研究開始

- 予防・治療研究および血清療法の導入 -

1892 (明治 25) 年

ドイツ留学から帰国後、福沢諭吉、森村市左衛門、長与専斎らの援助を受けて、日本で初めての私立伝染病研究所を設立する。翌年、国から創立補助および研究所費補助として助成金が下付された。内務大臣の命令書：「伝染病研究所は各種伝染病の原因及び予防治療法を研究し、国家衛生法の審事機関たることを力むべし」、「伝染病研究所の事業はすべて医学博士北里柴三郎の指揮に託すべし」（命令書より抜粋）。

1893 (明治 26) 年

福澤諭吉等の協力・援助を再度受け、結核専門病院「土筆ヶ岡養生園」を開院した。

1894 (明治 27) 年

香港で発生したペストの原因調査に際しては現地到着後、数日の間にペスト菌を発見した。



国家衛生行政への貢献

1899（明治 32）年

北里柴三郎所長の私立伝染病研究所における業績と事業の重要性を認識した政府は、更なる基礎研究・応用実践の充実を図り、内務省管轄の国立とした。同時に痘苗や治療血清の製造施設を統合し国立伝染病研究所の所長として北里は予防医学・公衆衛生行政・研究・実践等、総ての実質的な指導者として、その責務を担うことになる。

北里は自身の研究はもとより、熱き向学心に燃えて入所してきた多くの門下生たちを一流の研究者に育てた。例えば北島多一（蛇毒の研究）、志賀潔（赤痢菌の発見）、秦佐八郎（最初の化学療法剤サルバルサンの発見）、宮島幹之助（寄生虫の研究）、野口英世（ペストの防疫）などが挙げられる。



医道論草稿時の日本の状況

- ・ 開国による国際的交流、富国強兵・海外出兵などの要因によりもたらされる伝染病の侵入と疫病に対する、明治新政府の実質的な対応の遅れと脆弱性が露呈された。
- ・ 天然痘・赤痢・コレラ等の伝染病に対する早急な防疫の整備が必要とされた。
- ・ 明治7（1874）年～9（1876）年：天然痘の大流行
- ・ 明治10（1877）年：コレラの大流行
- ・ 明治8（1875）年6月：衛生事務が文部省から内務省に移管
内務省衛生局で取扱う

* 北里は東大医学部卒業後、内務省衛生局に就職



北里柴三郎博士

明治から昭和初期にかけて医学の発展に貢献し、近代日本医学の基礎を築いた先駆者・北里柴三郎。

『医学は、科学的基盤の上にその実践を図るべきである』と提唱し実学の精神に立脚した理念のもと、当時の脆弱な医療体制の抜本的改善に尽力した。

伝染病の脅威から国家国民を救うことが医学に従事するものの責務であるとの考えより、伝染病に対する適切な予防と治療法の研究及び公衆衛生の向上に取り組む。



研究・教育の基本方針

研究活動の到達点は《実学》であり、研究結果の実践的応用を常に心掛けるように指導した。

- 1．研究の目的は何事によらず道楽にするのではない。
- 2．研究結果が実際の役に立つ、あるいは研究する方法手段の助けになる、あるいは実際の治療、あるいは予防の上に実益になるという方向に向かって研究方針を立てる。
- 3．またその得たる所の事実になんとも役に立つものがあつたならば、それを速やかに実際に移すということに努力しなければならない。
- 4．ただ、学理学説を立てて喜んでいるのは世の中の閑人の仕事である。